

大アミールによるカリフ交代に関する一考察

— 大アミール・トゥーズーンの事例を中心に —

柴 山 滋

1. はじめに

大アミール (Amir al-Umarā')⁽¹⁾ は、324/936 (ヒジュラ暦/西暦、以下同様) 年にアッバース朝第 20 代カリフ・ラーディー (al-Rāḍī: 位 322-329/934-940) が当時のバスラとワーシトの総督であったイブン・ラーイク (Ibn Rā'iq) を大アミール (任 324-326/936-938) に任命したことで、カリフに代わりイスラーム史上で本格的に政治・軍事等の権限を行使する最高職となった。この大アミールの地位は 334/946 年のブワイフ朝のバグダード入城以前はのべ 7 名の軍人総督や将軍たちに、それ以降はブワイフ朝の一部君主たちによって担われた。

筆者はこれまで大アミールのイスラーム史上における意義付けを行うことを目的に、個々の大アミールが実際に行使した権限の実態に関する考察を行ってきた。現在はブワイフ朝のバグダード入城以前ののべ 7 名の大アミールの中で 6 番目に同職に就任したトゥーズーン (al-Muzaffar Abū al-Wafā' Tūzūn al-Turkī: 任 331-34/943-45) の時期の考察を進めている。その手始めとして彼の経歴に関する考察⁽²⁾ を行ったが、その中で他の大アミールとの比較で顕著な事項の 1 つが、彼はカリフを交代させた最初の大アミールであるという点である。10 世紀半ば～後半のカリフと大ア

ミールを含むそれ以外の政治勢力との関係については、主としてブワイフ朝との関係で論じられた研究がいくつか存在する⁽³⁾。しかし、カリフとブワイフ朝のバグダード入城以前の大アミールとの関係についてはまだ本格的な考察がなされていない。そこで本稿では第 21 代カリフ・ムッタキー (al-Muttaqī: 位 329-333/940-944) と第 22 代カリフ・ムスタクフィー (al-Mustakfi: 位 333-334/944-946) の 2 人のカリフとその期間中に大アミールを務めたトゥーズーンとの関係を検討することでその特色を明らかにし、それをもとにしてカリフ交代を可能にさせた条件について考察したい。10 世紀半ばにはその他にもカリフ交代の事例が存在するが、本稿の考察によって他の事例との比較も可能となり、またそのことでカリフと大アミールとの権力関係の在り方もより明確にできるものとする。なお本稿で使用する「カリフ交代」とは、「前カリフが生前に不本意に廃位され、強制的に次のカリフに位を譲られたこと」を意味するものとする。

本稿では、主としてスーリー (al-Şūlī), ミスカワイフ (Miskawayh), イブン・アルアスィール (Ibn al-Athīr) の史料を使用した。スーリーはカリフ・ラーディーの家庭教師を務めたこともある、アッバース朝宮廷との関係が深かった人物である。彼の著作『ラーディーとムッタキーの情報』⁽⁴⁾ は、ラーディーとムッタキー時代の宮廷内

の様々な動きをはじめ、他の史料にはみられない情報を含んでいる。ミスカウィフはイラクのブワイフ朝を開いたムイッズ・アッダウラ (Mu'izz al-Dawla: 位 334-356/946-967) の宰相 (ワジュール) であったムハッラビー (al-Muhallabi) や後のファールスとイラクの同朝の君主であるアドゥド・アッダウラ ('Adud al-Dawla: 位 338-372/949-983) に仕えた、ブワイフ朝と関係が深い人物である。彼の著作『諸国民の経験と野心の結果』⁽⁵⁾ はヒジュラ紀元元年~369/622-982年及ぶ年代記であり、彼自身がブワイフ朝の高官から直接情報を入手し、さらに彼自身が実際に見聞して執筆にあたっていることが多いのでかなり精度の高い情報が含まれている。イブン・アルアスィール (555-630/1160-1233) は、王朝政府に継続的に出仕することなく、その大半を在野で過ごした人物である。彼の主著である『完史』⁽⁶⁾ は宇宙創造の時代から 628/1231年までを扱った編年体のイスラーム世界の史書で、10世紀のバグダードを中心とした中央政界の動きについても、詳細な記述がある。またこの他にも、必要に応じて他の史料から情報を補った⁽⁷⁾。

2. 2人のカリフとトゥーズーンとの関係の経緯

トゥーズーンがカリフと直接的な接触を持ったのは、彼の太アミール任命直前の 331/942-43年から彼の死去の 334年1月/945年8~9月までの期間である。以下、この時期のカリフとの関係の経緯を年代順に整理する。

(1) 331/942-43年

① カリフ・ムッタキーとの最初の接触

トゥーズーンがカリフと最初に直接面会したの

は、太アミール任命に関することである。それまで彼は主として太アミール・バジュカム (Bajkam: 在 326-329/938-941) 配下の軍団 (Bajkam al-Rā'iqī) の一武将として活動し、バジュカムの死後は分裂した同軍団の一部の武将として活動を継続した。太アミール就任直前の時点では、ハムダーン家出身の太アミール・ナーシル・アッダウラ (Nāṣir al-Dawla) の弟であるサイフ・アッダウラ (Sayf al-Dawla) 配下の部隊の武将としてワーシト (Wāsiṭ) に駐留し、さらにサイフ・アッダウラを追放して同地の支配権を掌握していた⁽⁸⁾。このようにトゥーズーンは一貫して軍人として活動し、それなりの功績もあげていたが、カリフと面会できる立場にはなかった。

しかし、サイフ・アッダウラは同年9月14日/943年5月22日にバグダードのハルブ地区 (Bāb Ḥarb) に滞在し、トゥーズーンと戦うことをカリフと書簡で約束した。これを知ったトゥーズーンはバグダードへ進んだ。この時サイフ・アッダウラは、トゥーズーンと戦火を交えることなく撤退した。こうして彼は9月26日⁽⁹⁾/943年6月3日にバグダードに入城し、アッバース朝政府の高官 (ahl al-Dawla) やさらにカリフ・ムッタキーと会見した⁽¹⁰⁾。これがカリフとトゥーズーン最初の会見であるが、その詳細は不明である。

次いで、トゥーズーンの大アミール任命の儀式が行われた。この時政府はトゥーズーンに賜衣 (khil'a) と軍旗 (liwā') を与え、クンヤ (父称) で呼ぶことを命じた。またスーリーによると、この儀式が行われたのは10月6日/943年6月13日である⁽¹¹⁾。

② ムッタキーとトゥーズーン間での不和の発生

太アミールとなったトゥーズーンは、彼の不在中のワーシトに侵入して略奪を行ったバリーディー

(al-Barīdī) 家に対処するために同年 11 月 13 日/943 年 7 月 9 日、バグダードに彼の有力指揮官 (akbar quwwād) の 1 人であるムハンマド・ブン・ヤナール・アッタルジマーン (Muḥammad b. Yanāl al-Tarjīmān) を残してワーシトへ進軍した。なお、このワーシト遠征時にトゥーズーンは、バリディー家から逃れてきたイブン・シールザード (Abu Ja'far Ibn Shirzād) を自らの書記 (Kātib) に採用している。

この時期に、ムッタキーとトゥーズーンの間には不和が生じた。その直接の原因はバグダードに残したアッタルジマーンがトゥーズーンを避けるようになったこと、および宰相のアブー・アルフサイン・イブン・ムクラ (Abū al-Ḥusayn Ibn Muqla) のトゥーズーンに対する恐れであった。トゥーズーンがワーシトに下った際、彼はアッタルジマーンに対する陰謀を示唆し、彼に対する中傷を行った。その知らせがアッタルジマーンに届くと、彼はトゥーズーンを避けるようになった。一方、イブン・ムクラはトゥーズーン所有の村の徴税請負をしていたが、その請負金額が不足した。そこで、トゥーズーンからその金額を請求されることを恐れた。さらに彼らは、トゥーズーンによるイブン・シールザードの採用をアルバリディーとの合意の上のこととみなした。そのため両者は手を組み、ムッタキーに対してトゥーズーンとアルバリディーの企てを吹聴するとともに、カリフ保護のためにモスルにいたナーシル・アッダウラに軍隊を送るように手紙を書いた。ムッタキー自身もトゥーズーンとアルバリディーの結び付きに不快感を募らせるとともに不安に襲われ、ナーシル・アッダウラの下に行くことを決意した⁽¹²⁾。

(2) 332/943-44 年

① ムッタキーのバグダード出立

このような状況でイブン・シールザードが 300 人を率いて進軍し、1 月 25 日/943 年 9 月 28 日にバグダードに入った⁽¹³⁾。このイブン・シールザードの派遣には、バグダードの政府内における不審な動きを封じるトゥーズーンのねらいがあったと思われる。ムッタキーは、イブン・シールザードがバグダードに入ったその日に彼と会見した。その際にイブン・ムクラとアッタルジマーンはイブン・シールザードを捕えるように薦めたが、ムッタキーはそれには応じなかった⁽¹⁴⁾。この時ムッタキーはイブン・シールザードをトゥーズーンの代理とみなし、トゥーズーンとの関係を拗らせないように配慮したものと考えられる。

しかしハムダーン家からの使者が軍隊を率いてバグダードに下って来ると、ムッタキーはバグダードを出立し、彼の家族、宰相、政府内の有力者らもそれに続いた⁽¹⁵⁾。イブン・シールザードはハムダーン家の勢力が接近して来ると身を隠し、ムッタキーが去った後に隠れ場所から現れてワーシトのトゥーズーンにムッタキーや宰相がバグダードから去った旨を知らせた。トゥーズーンはそのことを知ると、ムサー・ブン・スライマーン (Mūsā b. Sulaymān) なるものに 1,000 人を率いさせてバグダードへ派遣した。一方、彼自身はワーシトの徴税請負契約をアルバリディーと結び、さらに自分の娘を彼と結婚させた後に同地を出立し、3 月 10 日/943 年 11 月 11 日にバグダードに入った⁽¹⁶⁾。

そのころハムダーン家のナーシル・アッダウラは、カリフと会見するために軍隊を率いてタクリートに下った。ムッタキーは会見後にモスルへ向かった。他方トゥーズーンは 4 月下旬/943 年 12 月下

旬に軍営地からウクバラへ行き、さらにサーマッラー近郊のカスル・アルジャス (Qaşr al-Jaşş) へ進んだ。トゥーズーンはこの地でサイフ・アッダウラを打ち破ったが、部下たちの反抗により、バグダードへ戻った。しかしムッタキーとナーシル・アッダウラは再度トゥーズーンとの戦いのために、サイフ・アッダウラに全軍を預けてタクリートへ派遣した。トゥーズーンもこれに対抗してハルバー (Harbā) へ進軍した。両軍は8月1日/944年3月29日に遭遇し、サイフ・アッダウラは再び敗北してモスルへ撤退した。また、ナーシル・アッダウラもカリフらとともにナシービーン (Naşibīn) へ逃れた。

一説によると、この時トゥーズーンはムッタキーに「私は奴隷 ('Abd) であり、あなたに対立しているわけではない」との旨を書いたという。しかしムッタキーがこれを拒絶したため、トゥーズーンはモスルへ進み、そこを占領した。さらにトゥーズーンは、ナーシル・アッダウラにカリフを彼の下に送るように書いた。他方、ムッタキーは一連のことが済んだ後、トゥーズーンのところへ戻ることも考えていたという⁽¹⁷⁾。

ムッタキーは家族とともにナシービーンからラッカへ向い、9月1日/944年4月27日に到着した。ムッタキーは、自らの不快の理由とナーシル・アッダウラとの和解を薦める手紙をアブー・ザカリヤー・アッスーシー (Abū Zakariyā al-Sūsi) に持たせて、トゥーズーンへ派遣した⁽¹⁸⁾。ムッタキーのトゥーズーンに対する不快の理由は明記されていないが、これまでの経緯からトゥーズーンがバリーディーと結んだことであると思われる。いずれにせよ、カリフの提案を受けてトゥーズーンとナーシル・アッダウラは交渉を進め、10月1日/944年5月27日に和解が成立した。これによりトゥーズーンは、10月11日/944年6月6日にバグダー

ドに帰還した。

② ムッタキーのバグダード帰還の試み

ハムダーン家との和解成立後、トゥーズーンは11月半ば～12月上旬/944年7月～8月にかけて、ブワイフ家のアフマドへの対応に負われていた。他方、この時期、ムッタキーとハムダーン家間の関係に変化が生じていた。その理由はカリフの滞在に対してナーシル・アッダウラの不満が露わになり、それに応じてムッタキーもハムダーン家に不快感を持ち、ハムダーン家から離れることを考えた。そこでムッタキーはバグダードへ帰還するためにトゥーズーンとの文通を望んだ。そして、アブー・アリー・アルハサン・ブン・ハールーン (Abū 'Alī al-Ḥasan b. Hārūn) とアブー・アブド・アッラーフ・ブン・アビー・ムサー・アルハシミ (Abū 'Abd Allāh b. Abī Mūsā al-Hāshimī) の2名に親書を託して、トゥーズーンに派遣した。カリフの使者は12月/944年7～8月にバグダードに到着した。トゥーズーンはその使者の到着を大変喜んだ。そして同月18日/944年8月11日、裁判官、公証人、アッバース家やアリー家の者たちをはじめとした人々の前でその親書が披露された。2人の使者はトゥーズーンにカリフと宰相への誓約を行わせた。トゥーズーンもカリフに敬意を払うことを誓い、そのことを手紙に書いた。アルハサンはトゥーズーンと自分の手紙をカリフに送った⁽¹⁹⁾。これによってムッタキーはバグダード帰還への具体的な行動を起こすことになった。

(3) 333/944-45年

① イフシードとの会見

この年、ムッタキーはエジプトの支配者 (Şāḥib) イフシード・ムハンマド・ブン・トゥグジュ (al-

Ikhshīd Muḥammad b. Ṭughuj) にトゥーズーンへの不信感、および援助を求める手紙を書いた⁽²⁰⁾。この求めに応じて、イフシードは1月13日/944年9月5日にラッカに滞在していたムッタキーのところに到着した。そこで彼はムッタキーに謁見し、多くの贈物と金品を贈り、彼とともにエジプト・シリアへ来ることを働きかけた。しかし、ムッタキーはそのことを拒否した。次いで彼はトゥーズーンの恐ろしさを指摘したが、やはりムッタキーは聞き入れなかった。さらにイフシードは宰相のイブン・ムクラに対しても同様の説得をし、トゥーズーンの恐ろしさを指摘したが、やはりイブン・ムクラも彼の助言を受け入れなかった⁽²¹⁾。

このような時に、前述のトゥーズーンとアルハサンからの手紙が到着した。そのためムッタキーはその手紙の内容を信用し、バグダードへ下ることを望んだ。一方、イフシードも自らの軍隊を維持するための物資が不足してきたことと、彼に従う人々に対するラッカ滞在の経費がかさんできたことからしだいに苛立ちを見せるようになっていた。そこでイフシードは彼のグラームであるアルアズガリー (al-Azghalī) とムサーヒル・アッサーフィー (Musāfir al-Ṣāḥī) なるものをカリフに仕えさせた。その際に彼ら2人にそれぞれ多くの騎兵 (al-fursān) と歩兵 (al-rajjāla) を付けた。さらに彼はトゥーズーンに使者を送り、ムッタキーが下る決心をした旨を伝え、ムッタキーに従うように促す手紙を書いた⁽²²⁾。

そしてこの時、ムッタキーは誓いを再確認するために、カーディーのアフマド・ブン・アブド・アッラーフ・ブン・イスハーク (Aḥmad b. 'Abd Allāh b. Ishāq) をトゥーズーンに送った。このカーディーがバグダードに到着したのは、2月4日/944年9月26日であった。彼はカリフの指示

によって、トゥーズーンに対して賜衣と金の腕輪を与えた。他方、トゥーズーンはカリフの館の土地の整備を命じ、彼自身でそのことを取り仕切った。

② ムッタキーのバグダードへの帰還

こうしてムッタキーは1月26日/944年9月18日、ユーフラテス川をラッカからバグダードへ下り始めた。ムッタキーのラッカ滞在期間は1年と数日であった。その際にムハンマド・ブン・ファイルーズ (Muḥammad b. Fayrūz) とナクト (Naqt) なる2人のイフシードのグラームがいたという⁽²³⁾。ムッタキーはラフバ (Raḥba), アーナ (Āna) を経て、ヒート (Hit) に到着した。この間もムッタキーは、事を慎重に進めている。ラフバには数日滞在し、さらにアーナでは当地の国庫管財人 (khazzān bayt al-māl) の1人であったアルフサイン・ブン・アルマルズバーン (al-Ḥusayn b. al-Marzubān) なるものと会見してトゥーズーンや非アラブ人 (al-'ajam) の情報を収集している⁽²⁴⁾。しかしこのアルフサインはトゥーズーンの代弁人の1人で、すでにこの時カリフを見捨てており、彼からはトゥーズーンのカリフに対する不穏な情報を得ることはできなかった。さらにヒートに着いた時には、カーディーのアルヒラキー (al-khiraqī) とアブー・アルカーシム・サラーマ (Abū al-Qāsim Salāma) なるものを派遣した。彼らはバグダードでトゥーズーンと会見し、トゥーズーンは喜んで彼らを宮殿 (Dār al-Khilāfa) に案内し、王宮 (al-qaṣr) に漆喰を塗り、建物 (al-dār) の修復を命じた⁽²⁵⁾。また別の史料によれば、この時ムッタキーはトゥーズーンにアルムザッファルというラカブを与えたという⁽²⁶⁾。ムッタキーは、彼の使者が戻るまで6日間ヒートに滞在した。そしてカーディー・アルヒラ

キーがヒートに戻るとムッタキーはトゥーズーンの様子を尋ね、アルヒラキーはトゥーズーンのことを彼に報告した。ムッタキーはアルヒラキーの報告を完全に信用し、彼をトゥーズーンのもとに再度派遣した。アルヒラキーは2月15日/944年10月7日にバグダードに入った。一方、トゥーズーンはバグダードを立ち、そこから6ファルサファ（約36 km）離れたアルシンディーヤ（al-Sindiya）⁽²⁷⁾ という場所に滞在した。そして、イブン・シールザードに対してカリフと会うためにアンバールへ行くことを命じた。そして彼とともに、非アラブ人の一団を派遣した。

③ アブド・アッラーフ・ブン・アルムクタフィーとトゥーズーンの接触

ムッタキーとの会見を進める一方で、トゥーズーンはアッバース家出身のアブド・アッラーフ・ブン・アルムクタフィー（‘Abd Allāh b. al-Muktāfi）⁽²⁸⁾ なる人物と密かに面会し、彼に忠誠の誓いを行っている。その経緯は、以下のようである⁽²⁹⁾。

トゥーズーンに対して影響力がある彼の代理人（wakīl）⁽³⁰⁾ のアブー・アルアッバース・アッタミーミー・アッラージー（Abū al-‘Abbās al-Tamīmī al-Rāzī）⁽³¹⁾ なる人物が、ある日イブラーヒーム・ブン・アッラバンバズ・アッダイラミー（Ibrāhīm b. al-Rabānbadh al-Daylamī）⁽³²⁾ に会い、彼の会合に来るように求められた。アッラージーはトゥーズーンの許可を得て、チグリス川に面したアルカラリーティー地区（Dār al-Qarārīti）のアッダイラミーの館に行った。そこでアッダイラミーは知り合いの女性のことに言及し、その女性の話として、現在のムッタキーとトゥーズーンの関係、理知的で敬虔なかつてのカリフの子供の一人の存在、ムッタキーの廃位と多くの財

の提供、トゥーズーンに渡りをつけることなどについて語った。アッラージーはその女性に会って、直接話を聞くことを要求した。そこでアッダイラミーは、アッラージーをその女性のところに案内した。その女性の名前はフスン・アッシーラージーヤ（Ḥusn al-Shirāzīya）といい、アブー・アフマド・アルファドル・ブン・アブド・アッラフマーン・アッシーラージー（Abū Aḥmad al-Faḍl b. ‘Abd al-Raḥmān al-Shirāzī）の義理の母であり、アラビア語とシーラーズ地方のペルシア語を話した⁽³³⁾。そしてフスンは、アッダイラミーとほぼ同様の話をした。そこでアッラージーはフスンに、かつてのカリフの子供の一人の男性に会って話しを聞くことを求めた。フスンは、翌日の会見を承諾した。

翌日、アッラージーはその男性と会見した。その男性は婦人服でイブン・ターヒル地区（Dār Ibn Ṭāhir）から現れ、アッダイラミーの館に入った。そこでアッラージーは、その男性の名前がアブド・アッラーフで、アッバース朝第17代カリフ・アルムクタフィー（位289-295/902-908）の息子であること、シーア派に好意的なこと、現状を追認する意思を持っていることを知った。さらにアブド・アッラーフは60万ディーナールを提供し、その中の20万ディーナールをトゥーズーンに引き渡すことも申し出た⁽³⁴⁾。

アッラージーは、それらのことを自分一人で処理できるのではないと考え、トゥーズーンのところへ報告に行った。彼はトゥーズーンの館に面したアルフダイダ（al-Ḥudayda）という場所で、アブー・イムラーン・ムサー・ブン・スライマーン（Abū ‘Imrān Mūsā b. Sulaymān）なる人物と出会った。アッラージーはこれから話すことを秘密にすることを誓わせた上で、この件を彼に話し、助力を求めた。ムサーはその件に介入する

ことは拒否したが、秘密を守ることは約束した。その後アッラージーはトゥーズーンのところに行き、これまでの経過を彼に話した。トゥーズーンはこの話に興味を示し、アブド・アッラーフに直接会うことを求めた。アッラージーはそのことを了解したが、この件をイブン・シールザードには伝えないことを求め、トゥーズーンはその件を了承した⁽³⁵⁾。

こうしてアブド・アッラーフ・ブン・アルムクタフィーとトゥーズーンとの面会が、2月14日/944年10月6日に行われた。一説では、アブド・アッラーフはムーサー・ブン・スライマーンの館へ行った⁽³⁶⁾。そこでトゥーズーンはアブド・アッラーフと会見し、その夜のうちに彼に忠誠の誓いを行ったが、そのことは秘密にされた。このような出来事を踏まえて、トゥーズーンはムッタキーとの会見に臨んだのである。

④ ムッタキーとの会見と廃位

アブド・アッラーフとトゥーズーンの間出来事を一切知らないムッタキーはヒートからアンバルへ行き、そこでトゥーズーン側のイブン・シールザードと会見した。トゥーズーン側の秘密がきちんと守られたために、イブン・シールザードはこの時トゥーズーンによるアブド・アッラーフへの忠誠の誓いの実施を全く知らなかった。彼は馬から降りて、ムッタキーの面前の大地にキスをした。そしてムッタキーはトゥーズーンのことを尋ねた。イブン・シールザードはムッタキーに対して、トゥーズーンは大変従順で、誠実で、彼が来ることをとても喜んでいて旨を伝えたという⁽³⁷⁾。

翌日、ムッタキーの一行はバグダードへ向けて出発した。そしてアルシンディーヤで、ムッタキーとトゥーズーンの会見、およびムッタキーの逮捕と廃位という一連の出来事が起こった⁽³⁸⁾。

両者の会見は、2月中～下旬/944年10月⁽³⁹⁾に行われた。一行が下った時、ムッタキーはイフシードからプレゼントされたヒョウの輿 (qubbanumūr) に乗っていた。他方トゥーズーンは彼を出迎えて下馬し、大地の上に屈み、彼の面前で大地に2回キスした。そしてトゥーズーンはムッタキーのそばを歩き、ムッタキーとその家族、宰相をはじめとした随行者たちを用意したテントに案内した。この時、アッラージーがムッタキーに対する行動を促した。そこでトゥーズーンの部下のダイラム人たちがムッタキーを取り囲み、捕らえた。彼らの幾人かは、輿が載っているラバの手綱を掴んだ。そして乗用動物と輿が引き渡され、宝庫をはじめとしたあらゆるものが略奪された。

一方でトゥーズーンは、アブド・アッラーフを連れてくるためにイブン・ターヒル地区に部下のサーフィー・アルハージン (Şāfi al-Khāzin) を送った。そしてムッタキーから印章 (al-khātām) を取り、それをサーフィーに渡した。サーフィーはイブン・ターヒル地区に行き、彼を連れ出した。そしてきちんとした身なりをさせ、印章を渡し、剣ベルトを身に付けさせ、トゥーズーンの大テントへ連れてきた。

トゥーズーンはアブド・アッラーフに権力を約束し、ムッタキーにコフル (kuḥl) を塗らせた⁽⁴⁰⁾。そしてムッタキーの両眼をくり抜くことを命じ、彼の両眼が取り出された。この時ムッタキーが泣いたので、その声を掻き消すためにトゥーズーンは部下たちに太鼓を打つことを命じた。そしてアブド・アッラーフに忠誠の誓いが為され、ムスタクフィー・ビッラーフとラカブが付けられた⁽⁴¹⁾。その後、新カリフからトゥーズーンに賜衣が与えられ、カリフ位はムスタクフィーにわたった。他方ムッタキーは自身で廃位を宣言した後に新カリフに忠誠の誓いと挨拶し、その後アッシンディー

ヤの対岸の島に送られた。トゥーズーンは翌日、バグダードへ下った。そしてムッタキーも両眼が見えない状態でバグダードに入り、彼から外衣(al-burd)と棒(al-qaḍīb)と印章が取りあげられ、ムスタクフィーに渡された。このようにしてムッタキーは廃位されたが、彼のカリフ位は3年11ヵ月であった。その後ムッタキーは、357年8月/968年7月に60歳で亡くなった⁽⁴²⁾。

⑤ ムスタクフィーとの関係

カリフに就任したムスタクフィーは、宰相にアブー・アルファラジ・ムハンマド・ブン・アリー・アッサーマリー (Abū al-Faraj Muḥammad b. 'Alī al-Sāmarrī)⁽⁴³⁾を任命したものの、アブー・アルファラジは宰相の名前のみで、行政の実権はトゥーズーンの書記であるイブン・シールザードにあった。またムスタクフィーはトゥーズーンに賜衣とネックレス(al-ṭawq)、宝石をちりばめた王冠(al-tāj)を与えた。その時トゥーズーンはカリフの面前で椅子に座り、賜衣・王冠・ネックレス・腕輪(al-siwār)は自分の家へ送ったという。さらにイブン・シールザードと裁判官たち⁽⁴⁴⁾に対しても賜衣が与えられた⁽⁴⁵⁾。他方、ムスタクフィーのカリフ就任に貢献したフスはアラム('Alam)と改名して、女執事(Qahramāna)となってムスタクフィーの行動を管理した⁽⁴⁶⁾。

その後のムスタクフィーとトゥーズーンとの関係は比較的良好であり、ムスタクフィーはトゥーズーンの遠征にも同行している。同年7月/945年2~3月、モスル地域の徴税請負の約束をしたにもかかわらず、そのことを履行しようとしないうハムダーン家のナーシル・アッダウラに対して、トゥーズーンはムスタクフィーとともにバグダードからモスルに向けて出撃した。しかしその後両者間で和平が成立したので、彼らはバグダードに

戻った。また同月30日/945年3月18日、ブワイフ家のアフマド・ブン・ブワイフがワーシトに進軍したため、この時もトゥーズーンはムスタクフィーとともにバグダードからワーシトへ向かった。しかしその知らせを聞いたアフマドは、9月6日/945年4月22日に撤退した。彼らはバスの徴税請負契約をアブー・アルカーシム・アルバリーディー (Abū al-Qāsim al-Barīdī)と締結し、10月8日/945年5月24日にバグダードに帰還した⁽⁴⁷⁾。

その一方で、ムスタクフィーはトゥーズーンに対して過剰な接待も行っている。ムスタクフィーが狩猟から戻った時にトゥーズーンと食事をした際、彼らはテーブルをともにし、トゥーズーンのために軽食を用意し、着席場所にハンカチを敷いた。以前のカリフたちはこのようなことを高官の誰一人にも許したことがなく、ムスタクフィーもそれまでは誰にもこのような待遇をしたことがなかったという。また他日、宮殿に招待されてその帰宅の際に、トゥーズーンは自分の乗り物(dābba)をカリフのみが使用できる場所であったアッリワーク・アッタスウィーニー(al-Riwāq al-Ṭas'īnī)に呼んだ。そして自らの面前にカリフ用の小さな金属のお盆を運ばせ、残りの召使たちにはムーニス地区(Dār Mu'nis)にある彼の家まで彼の前を先導するように命じた。さらに賜衣が授与された後、トゥーズーンは馬上に金のサドルを運ばせ、剣と金のベルトを付けたが、それらのことは人々を驚かせたという。このようなトゥーズーンに対する接待の背景には、イブン・シールザードがアラムを逮捕する姿勢を示したのに対して、それを恐れたアラムがトゥーズーンとイブン・シールザードの歓心を買うことをムスタクフィーに要求し、ムスタクフィーが彼女の要求に応じたためとされる。そして、その費用は彼女の財産か

ら支出されたという⁽⁴⁸⁾。このようにムスタクフィーとトゥーズーンとの関係は、トゥーズーンの優位の下で安定していたといえる。しかし334年1月/945年8～9月にトゥーズーンがバグダードの自宅で病死すると、この関係にも終了した。

3. 2人のカリフとトゥーズーンとの関係の特色

大アミールは軍事・行政などのいわゆる世俗の政治に対する権限をカリフから委託されていたが、何事も自由にできたわけではない。まして自らの支配の正当性を保障するカリフに関する事柄であれば、なおさらである。したがって、本章では2人のカリフとトゥーズーンとの関係の特色を上記2人のカリフとトゥーズーンとの関係の経緯を踏まえて検討し、さらに大アミールによるカリフ交代の条件を探る考察の前提としたい。

(1) ムッタキーとの関係

① 両者間の接触

ムッタキーとトゥーズーンの接触に関する第1の特色は、両者が直接会うことや行動をともにすることはほとんどなく、その接触の多くが使者や手紙を通してのものであったことである。両者が直接会ったのは、331年9月/943年6月のトゥーズーンがバグダードに入城した時、同年10月/943年6月の大アミールの任命式の時、333/944-945年2月中～下旬/944年10月のアッシンディーヤの会見時の3度である。それ以外は、332/943-944年と翌年のトゥーズーンの使者としてのイブン・シールザードとの会見、332/943-944年のハムダーン家との和解を勧めるムッタキーからの手紙、332年12月/944年7～8月からアッシンディーヤでの会見に至るムッタキーのバグダード帰還の

ためのトゥーズーンとの間の一連の使者のやり取りに見られるように、使者や手紙を通してのものであった。その理由の1つは、大アミール就任後のトゥーズーンが331年11月13日/943年7月9日にバリーディー家への対応のためにワーシトへ下ったことでバグダードを不在にしたこと、またムッタキーの方も332年1～2月/943年9～10月にかけてハムダーン家に庇護を求めてバグダードからモスルへ去り、さらに同年8月/944年3月以降はラッカに滞在していたことにみられるように互いに物理的に離れた場所にいたことである。その背景には元来好ましく思っていなかったバリーディー家とトゥーズーンが結んだことに対して、ムッタキーが不快感を持っていたことが影響していると考えられる。

第2は直接的な接触が少なかったことによってそれぞれの部下たちのカリフに対する影響力が大きくなり、そのことが両者間の亀裂へと繋がったことである。その例はトゥーズーンがバグダードからワーシトに下った際に、トゥーズーンの代理人であるアッタルジマーンとカリフの宰相であるイブン・ムクラが手を組み、トゥーズーンとバリーディー家の企てをカリフに進言したことにみられる。そのためムッタキー自身のバリーディー家に対する不快感も重なり、トゥーズーンに対する疑心暗鬼を増幅させ、両者間の溝を深くしたと思われる。

第3は、ムッタキーがトゥーズーンの遠征に一度も同行していないことである。ムッタキー時代にトゥーズーンは331年11月/943年7月のバリーディー家に対するワーシトへの遠征、332年には4～8月/943年12月～944年3月にかけてモスルを拠点にしたハムダーン家との戦い、11～12月/944年7月にかけてワーシトに進軍してきたブワイフ家との戦いの合計3回の遠征を行っているが、

いずれの遠征にもムッタキーの姿はみられない。制度上では大アミールはカリフの下に位置付けられるので、カリフが大アミールの遠征に同行する必要はない。しかしこの時期、カリフが大アミールの遠征に同行することは珍しくない⁽⁴⁹⁾。このことは先にも指摘したようにムッタキーの在任中に両者が物理的に離れていたことに加え、ムッタキーとトゥーズーン間の結び付きがそれ程強固でなかったことを示すものと思われる。

② ムッタキーに対する意図の巧みな隠蔽

トゥーズーンがいつごろからムッタキー廃位の意図を持つようになったのかは史料中に明記されていないが、少なくともその意図を廃位直前まで隠し通したことは明らかである。そのことは、トゥーズーン自身と彼の部下たちの行動から推察できる。

まずトゥーズーン自身の行動であるが、ムッタキーはハムダーン家に対する不快感を持って以来バグダードに帰還することを望んだが、トゥーズーンに対する警戒感を決して解いたわけではなかった。そのことはムッタキーが332年12月/944年7～8月と333年1月/944年8～9月にはラッカから、さらに333年2月/944年9～10月にはヒートから、トゥーズーンの服従の意図を確認するために合計3回使者を派遣していることから明らかである。しかしトゥーズーンはその度に使者を丁重にもてなし、ムッタキーに対する誓約を行い、また時には宮殿の整備を自ら取り仕切っている様子を示している。またアッシンディーヤにおけるムッタキーとの直接会見の際には、彼自身でムッタキーを出迎えて下馬し、忠誠の誓いを行い、さらにムッタキー一行を用意したテントに先導した。このようにトゥーズーンはムッタキーの逮捕直前まで、彼に対する臣従の姿勢を示し、完全に自らの意図を隠し通すことに成功した。

次にムッタキーは、トゥーズーンの部下たちからもトゥーズーンの意図を知ることができなかった。その例がアーナにおけるアルフサインとの、またアンバールにおけるイブン・シールザードとの会見である。ムッタキーはトゥーズーンに関する情報を彼らから集めようと試みたが、何れの場合もトゥーズーンの不穏な動きに関する情報を収集することはできなかった。アルフサイン、イブン・シールザードともにすでにトゥーズーン側の人間であったが、アッタルジマーンの例からも明らかのように、トゥーズーン自らがいくらか慎重になっても、部下たちの不満や裏切りがあれば情報統制は覚束なくなる。そこでその点を考慮してカリフ交代という重要な政策に対しては政権内の信頼できるごく一部の部下たちであり、その他の者たちにはその件を一切伏せることで情報漏洩の危険を回避していたと考えられる。

アッバース朝時代の10世紀前半も、他の時期と同様に陰謀や裏切りなどの行為が横行していた。そのような中で、トゥーズーンがカリフ廃位の意図を最後の瞬間まで隠蔽できたことはムッタキーが騙されたというより、トゥーズーンが政権内の部下たちに対する強固な統率力を保持していたことを意味すると言えよう。

(2) ムスタクフィーとの関係

① 新カリフ候補者との接触

カリフの交代を実現させるためには前カリフの廃位だけでなく、その後継者となる人物を見つけ、新カリフとして即位させることが必要である。その際に新カリフ候補となる人物はカリフ位就任の諸条件を満たし、かつトゥーズーンに友好的な人物であることが必要である。このような条件を整えるための行動について、トゥーズーン側とカリフ候補者側の動きから検討する。

1) トゥーズーン側の動き

この場合、人物の選定について大切なことは、第1に公にはできない任務を遂行する信頼できる部下の存在である。この時、カリフ候補者であるアブド・アッラーフやその後ろ盾になっていたフスンなる女性に最初に接触したのは、アッラージーである。彼はフスンやアブド・アッラーフとの面会やトゥーズーンとアブド・アッラーフの非公式会見を設定している。彼についてはこの時の活動以外に記録が存在しないために、トゥーズーンの側近であること以外ははっきりしない。しかしこの件について書記であったイブン・シールザードには知らせないことをトゥーズーンに対して申し出て了承されていることやイブン・シールザードは主としてトゥーズーン政権における公の政策において活躍していたこと⁽⁵⁰⁾を考慮すると、彼は裏方の極秘任務のようなことを担当し、かつトゥーズーンに信頼され、彼に対する影響力も大きかった部下であったと推測される。他方、ムサー・ブン・スライマーンなる人物も存在する。彼についてもこの時の活動以外に記録がないので、その経歴は不明である。しかし彼はこの問題についてアッラージーから相談を受けていること、およびトゥーズーンとアブド・アッラーフとの非公式の会見の際に自らの館を提供したとされることから、彼もアッラージーと同様の任務を行っていたと考えられる。

第2にトゥーズーンとアブド・アッラーフの非公式の場での会見と忠誠の誓いの実施である。この会見の詳細な記録は存在しないため、その場で具体的にどのような儀式が行われたのかは不明である。通常、忠誠の誓いは公の場でなされ、現にトゥーズーンもムスタクフィーに対する公の場における忠誠の誓いを行っている。しかし公の場での忠誠の誓い以前に非公式にこれを実施すること

は、トゥーズーンとアブド・アッラーフ双方の信頼と結束を確認するとともに、彼を新カリフ候補者として担保しておくためにも必要不可欠なことであったと考えられる。

2) カリフ候補者側の動き

カリフ候補者側としては、第1にフスン・アッシーラージーやなる女性の存在が重要である。彼女は素行において必ずしも評判のよい女性ではなかったようであるが、アブド・アッラーフのカリフ位就任には熱心であり、当時トゥーズーンの下で働いていたアッダイラミーなるものを介してアッラージーと会見し、アブド・アッラーフとトゥーズーン側との橋渡しに一役を担っている。彼女はアブド・アッラーフの窓口となる代理人であり、トゥーズーン側のアッラージーやムサーに匹敵する存在であったといえる。そのため彼女はアブド・アッラーフのカリフ就任後に、その執事になっている。

第2にアブド・アッラーフがアッラージーとの会見の際に合計60万ディーナールの提供を申し出たことも、トゥーズーン側が彼を新カリフとして迎えるための要件として作用したと思われる。この時期は配下の兵士が金銭を要求する騒動が頻繁しており、トゥーズーン自身もハムダーン家との第1回目の戦いであるカスル・アルジャスの戦い後にそのような騒動に遭遇している。軍事政権である大アミールの重要な権力基盤は配下の軍隊であるため、その軍隊を満足させるために金銭はいくらでも必要であった。そのような状況の下で、アブド・アッラーフからの金銭提供の申し出はトゥーズーンをととても喜ばせたと思われる。

② 即位後のムスタクフィーとの関係

ムッタキーとは任命と廃位の時にしか直接会っていないのに比べて、それとは対照的にムスタク

フィーとは密接な繋がりを保っている。バグダードにおける公式の会見での賜衣の授与にはじまり、333/944-45年のハムダーン家のナーシル・アッダウラに対するモスル遠征やブワイフ家のワーシト進軍に対する遠征にもムスタクフィーはトゥーゾーンに同行している。しかしムスタクフィーは宰相を任命したものの、軍事・行政のような実務においてはトゥーゾーンの書記であったイブン・シールザードが国務を担当したように、大アミールの権力がカリフに優越していた。その点は、イブン・シールザードがムスタクフィーの女執事であるアラムを逮捕しようとした時のムスタクフィーのトゥーゾーンに対する過剰な接待の様子にも表れている。

4. カリフ交代の条件

これまでトゥーゾーンと2人のカリフとの関係の特色を考察したが、それらの特色の中でカリフ交代のための条件として重要なものは、①前カリフとは直接的な接触がほとんどなく、そこに部下たちの介入による相互の誤解も重なり、意思疎通が不可能な程に疎遠な関係になってしまったこと、②前カリフ廃位の意図を最後まで隠すことを可能にした自らの行動の慎重さと組織に対する統率力を有していたこと、③大アミールの意向に沿う新カリフの候補者の存在、④そのような新カリフ候補者を探し出し、公に知られることなく忠誠の誓いを行うことを可能にした部下たちが存在したこと、の4点であろう。①については、その支配の正当性をカリフからの統治権の委任に置いている大アミールにとって、現カリフとの友好的な関係が維持されている限り、カリフを交代させる必要はない。したがってカリフ交代のためには、現カリフとの関係が疎遠になる程に悪化することが必

然的な前提条件となる。②については、自らの意志をきちんと持って、その目的達成のための強固な自制心を有するという大アミールの個人的な資質とともにカリフ交代という目的を可能にする統率がとれた強力な政権が必要なことを意味する。③については、たとえ上記の2つの条件が整ったとしても、前カリフに替わる新カリフ候補者が不在ならば、カリフ交代自体が成立しない。④については、新カリフ候補者を見つけることは多分に運に左右されることもあるが、カリフ就任を望む者やその支援者を察知し、彼らと接見し、さらに秘密裏にそのカリフ候補者に対する忠誠の誓いをなすという一連の隠密行動を託すことができる、固い絆で結ばれた信用がおける部下が存在していたことを意味する。そのことはその政権が、あらゆる面で適材適所に配置できる様々な人材を有していたことを示唆するものでもある。

カリフ交代の実現のためにはこれらの条件が一時に過不足なく揃うことが必要であり、この中のいずれか1つの条件でも欠けるとカリフ交代は不成立となる。大アミール・トゥーゾーンの時代は、まさにそのような条件がそろった時期といえるのである。

5. 結びにかえて

以上、大アミール・トゥーゾーンの時代を例にとってカリフ交代のための条件について考察をしてきた。しかし本稿で抽出した4条件はあくまでもトゥーゾーンの時代の状況を背景としたものであり、時代状況が異なれば、当然カリフ交代の条件にも違いが出てくるものと思われる。今後はその他のカリフ交代の事例も合わせて考察することによりその条件をより精査するとともに、カリフと大アミールをはじめとした各勢力との関係を掘

り下げたい。またそのことは、この時期のカリフのあり方も明らかにすることにつながるものと考えられる。

注

- (1) 大アミールについては、*The Encyclopaedia of Islam*, new edition, Leiden, 1954-2004 (以下 EI, II と略記), Vol. 1, p. 446, “Amir al-Unarā” を参照。
- (2) 拙稿「大アミール・トゥーズーンの経歴に関する考察」『人文研紀要』, 第 68 号, 中央大学人文科学研究所, 2010 年, pp. 361-385.
- (3) この時期のカリフとブワイフ朝の関係を扱ったものに Busse, H. *Chalif und Grosskönig: die Buyiden im Iraq (945-1055)*, Beirut, 1969; Kabir, M. *The Buwayhid Dynasty Baghdad*, Culcutta, 1964; Donohue, J. *The Buwayhid Dynasty in Iraq 334H/945 to 403H/1012: Shaping Institutions for the Future*, Leiden, 2003; 橋爪烈「初期ブワイフ朝君主の主導権争いとアッバース朝カリフイマール、リヤーサ、ムルクの検討を中心に」『史学雑誌』, 第 112 編第 2 号, 史学会, 2003 年, pp. 60-83; Hanne, E. J. *Putting the Caliph in His Place: Power, Authority, and the Late Abbasid Caliphate*, Madison, 2007. 等がある。
- (4) Şūli:
Abū Bakr al-Şūli, Muḥammad b. Yaḥyā (d. 335/947), *Akḥbār al-Rādī billāh wa al-Muttaqī lillāh*, Cairo, 1935.
- (5) Tajārib:
Miskawayh, Abū ‘Alī Aḥmad b. Muḥammad (d. 421/1030), *Kitāb Tajārib al-Umam*, ed. H. F. Amedroz, 2 vols, al-Qāhira, 1914-1915. (trans. H. F. Amedroz, *The Eclipse of the Abbasid Caliphate*), 7 vols. London, 1920-1921.
- (6) Kāmil:
Ibn al-Athīr, ‘Izz al-Dīn Abū al-Ḥasan ‘Alī b. Muḥammad (d. 630/1233), *al-Kāmil fī al-Ta’rikh*, ed. C. J. Tornberg, 13 vols. Leiden, 1862.
- (7) その他、本稿で使用した史料とその略号は以下の通りである。
Murūj:
Abū al-Ḥasan ‘Alī b. al-Ḥusayn al-Mas‘ūdī (d. 345/956), *Murūj al-Dahab wa Ma‘ādin al-Jawhar*, 9 vols. Tehran, 1970.

- ‘Uyūn;
amoym, *Kitāb al-‘Uyūn wa al-Hadā’iq fī Akḥbār al-Haqā’iq*, ed. ‘Umar al-Sa‘īdī, vol. 4i, 4ii, Dimashq, 1972-1973.
- Takmila;
al-Hamadāni; Muḥammad b. ‘Abd al-Malik (d. 521/1127), *Takmila Ta’rikh al-Tabarī*, Beirut, 1961.
- Muntaẓam;
Ibn al-Jawzī (d. 597/1200), al-Muntaẓam, Na‘im Zurzūr (ed.), 18 vols. Beirut, 1992.
- al-Munqaṭi‘a;
al-Azdī (d. 613/1216), *Aḥbār al-Duwal al-Munqaṭi‘a Ta’rikh al-Dawla al-Abbāsiya*, al-Madīna, 1988
- Yāqūt:
Yāqūt b. ‘Abd Allāh al-Ḥamawī (d. 626/1229), *Mu‘jam al-Buldān*, 5 vols. Beirut, 1957
- Bidāya;
Ibn Kathīr, ‘Imād al-Dīn Ismā‘il b. ‘Umar b. Kathīr (d. 774/1374), *al-Bidāya wa al-Nihāya*, 14 vols., Beirut, 1966.
- Ta’rikh;
al-Suyūṭī, Jalāl al-Dīn Abū al-Faḍl ‘Abd al-Raḥmān b. Abī Bakr b. Muḥammad al-Suyūṭī (d. 911/1505), *Ta’rikh al-Khulafā’*, Beirut, 1988.
- Shadrāt;
Ibn al-‘Imād (d. 1089/1678), *Shadrāt al-Dhahab fī Akḥbār min Dhahab*, 8 vols. al-Qāhira, 1350-1351 A. H.
- (8) トゥーズーンの大アミール任命までの活動については、前掲拙稿 pp. 364-369 を参照。
 - (9) Şūli, p. 242 では、9 月 25 日としている。しかし Tajārib, II, p. 44 には 9 月 25 日にトゥーズーンの部下であるアッタルジマーン (al-Tarjimān) がトゥーズーンのためにバグダードで演説を行い、翌日にトゥーズーンがバグダードに入ったことが記されている。
 - (10) Tajārib, II, p. 44, cf. Kāmil, Vol. 8, p. 399, Bidāya, Vol. 6, p. 205, Şūli, p. 242. なお、‘Uyūn, p. 384, Shadrāt, p. 329, Ta’rikh, p. 316 には入城日の記載がない。
 - (11) Tajārib, II, p. 44, Takmila, p. 134, Şūli, p. 242 を参照。他方 Kāmil, Vol. 8, p. 399, Ta’rikh, p. 316, Bidāya, Vol. 6, p. 205, ‘Uyūn, p. 384 では、大アミール任命時の賜衣の授与のみの記述で日付はない。さらに Shadrāt, p. 329 では大アミール任命の記述のみで、賜衣の授与や日付の記載はと

- もない。
- (12) この時のアッタルジマーンやイブン・ムクラの一連の行動については、Tajārib, II, p. 47, Kāmil, Vol. 8, pp. 400-401, 'Uyūn, p. 384 を参照。また Šūlī, pp. 242-243 では、ムッタキーが金を運ばせることでバリディー家のものたちと和解し、ナーシル・アッダウラとの関係を清算することをトゥーズーンが要求したが、ムッタキーはそれを拒否した趣旨のことを伝えている。
- (13) Tajārib, II, p. 47, cf. Kāmil, Vol. 8, p. 401, p. 406, Ta'riḫ, p. 316, 'Uyūn, pp. 384-385. Bidāya, Vol. 6, p. 207. ただし Kāmil, Vol. 8, p. 401 では「300人」の部分を「300人の騎兵 (rajul jarida)」, Kāmil, Vol. 8, p. 406 ではその日付を1月5日, 「300人」の部分を「300人のグラーム騎兵 (gulām jarida)」としている。
- (14) Tajārib, II, pp. 47-48, Takmila, p. 135.
- (15) Tajārib, II, p. 48, Kāmil, Vol. 8, p. 407, Takmila, p. 136, Bidāya, Vol. 6, p. 207. ただし, Tajārib, II, p. 48 ではサイフ・アッダウラ, Takmila, p. 136 ではアブー・アブド・アッラーフ・アルフサイン・ブン・サイード・ブン・ハムダーンが来たとしている。
- (16) Tajārib, II, p. 48, Kāmil, Vol. 8, p. 407, Takmila, p. 136, Bidāya, Vol. 6, p. 207, Šūlī, p. 251. なお, Bidāya, Vol. 6, p. 207 では, トゥーズーンの娘とアルバリディーとの婚姻をトゥーズーンとアルバリディーによるカリフに対する同盟としている。またトゥーズーンは同年7~8月/944年2~3月にかけて行われたハムダーン家との2度目の戦い(ハルバー(Ḥarbā)の戦い)のためにバグダードを去る際に, 彼の娘とアルバリディーの結婚の式典をアッシャムマーシーヤ(al-Shammāsiya)で行ったという(Tajārib, II, p. 49)。
- (17) Šūlī, p. 257.
- (18) Tajārib, II, p. 49, Kāmil, Vol. 8, pp. 407-408, Šūlī, p. 257, Takmila, pp. 136-137.
- (19) この年のムッタキーからの使者の派遣については, Tajārib, II, p. 67, Kāmil, Vol. 8, pp. 411-412, Takmila, p. 141, Šūlī, pp. 268-269, 'Uyūn, p. 396, Bidāya, Vol. 6, p. 208 を参照。
- (20) Šūlī, p. 281. この時に同様の手紙が, ホラーサーンの支配者にも送られたという。
- (21) ハムダーン家の者もムッタキーに対してトゥーズーンの恐ろしさを説いて警告したが, ムッタキーは信用しなかったという(Murūj, Vol. 5, p. 233)。
- (22) ラッカでのカリフとイフシードの会見とカリフの出発までの一連の経緯については, Kāmil, Vol. 8, pp. 418-419, Šūlī, pp. 278-279, 'Uyūn, pp. 400-402 を参照。
- (23) Tajārib, II, pp. 69-72. この2名のグラームと先述のアルアズガリーとムサーヒル・アッサーフィーなるイフシードの2名の部下との関係は, 史料中に記されていない。
- (24) さらに, ムッタキーはその地のトゥーズーンの館に入って彼らの秘密を調査している('Uyūn, pp. 402-403)。
- (25) 'Uyūn, p. 405.
- (26) Tajārib, II, pp. 69-72 ではこの時の使者をカーディーのアルヒラキーとイブン・シルザードとしている。また Takmila, pp. 141-142 では, その使者はアルヒラキーのみである。
- (27) バグダードとアルアンバル(al-Anbār)の間にあるイーサー運河(Nafr 'Īsā)に面したバグダードの諸村の1つである(Yāqūt, Vol. 3, p. 268)。なお, Tajārib, II, pp. 69-72 ではユーフラテス川岸の土手, Murūj, Vol. 5, pp. 233-234 ではイーサー運河岸の私領地(day'a)としている。
- (28) Kāmil, Vol. 8, p. 420 によると, 彼の呼称はムスタクフィー・ビッラーヒ・アルカーシム・アブド・アッラーフ・ブン・ムクタフィー・ビッラーヒ・アリー・ブン・アルムウタディド・ビッラーヒ・アブー・アルアッバース・アフマド・ブン・アビー・アフマド・アルムワフファク・ブン・アルムタワッキル・アララーヒ(al-Mustakfi billāh Abū al-Qasim 'Abd Allāh b. al-Muktafi billāh 'Alī b. al-Mu'tadid billāh 'Abī al-'Abbās Aḥmad b. Abī Aḥmad al-Muwaffaq b. al-Mutawakkil 'alā Allāh)である。
- (29) 両者の接触については, Tajārib, II, pp. 72-75, Kāmil, Vol. 8, pp. 420-422, Uyūn, pp. 403-405 を参照。'Uyūn の記述は, Tajārib や Kāmil の記述と比較すると細部が異なるため, ここでは主に Tajārib と Kāmil の記述に従った。
- (30) Tajārib, II, pp. 72-73 による。Kāmil, Vol. 8, p. 420 では, 「トゥーズーンの側近(khawāṣṣ)の一人」となっている。
- (31) Tajārib, II, p. 72, Kāmil, Vol. 8, p. 420 による。'Uyūn, p. 403 では, 彼の役割を演じる人物を, アブド・アッラーフ・ブン・スライマーン('Abd Allāh b. Sulaymān)としている。
- (32) Tajārib, II, p. 73. なお Kāmil, Vol. 8, p. 420 では, アッラバンバズの部分がアズビーンドール(al-Zūbindār)となっている。また 'Uyūn, p. 403 では, イブン・マーリク・アッダイラミー

- (Ibn Mālik al-Daylamī) となっており、彼はトゥーズーンの下で地位と仕事をしていたとされる。
- (33) フスンにはアッシーラージー (al-Shirāzī) なる人物と結婚している娘がおり、フスンとその娘はワイン (al-nabīdh) を飲み、売春婦 (al-fāhisha) としての悪い評判もあったという (‘Uyūn, p. 403)。
- (34) ‘Uyūn, p.404 では、アッダイラミーとアブド・アッラーフ・ブン・スライマーンがトゥーズーンの執事長 (mutammakīn) であったダクラー (Daklā) なる人物と会見して状況を説明し、次いでダクラーが彼ら二人をトゥーズーンに引き合わせている。なお ‘Uyūn には、トゥーズーンの会見前に彼の下で働いている役職者がフスンやアブド・アッラーフ・ブン・ムクタフィーと会った記述はない。また Kāmil, Vol. 8, p. 420 ではアブド・アッラーフ・ブン・ムクタフィーが提示した金額について、「80万ディーナールの中から、10万ディーナールをトゥーズーンに保証した」とある。
- (35) ‘Uyūn, p. 404 では、アブー・イムラーン・ムーサー・ブン・スライマーンに当たる人物は登場していない。また、当初は乗り気でないトゥーズーンをアッダイラミーとアブド・アッラーフ・ブン・スライマーンが説得している。
- (36) ‘Uyūn, pp. 404-405 では、会見場所をイブン・ターヒル地区に面した島としている。
- (37) ‘Uyūn, p. 406. cf. Šūlī, p. 280.
- (38) この時のムッタキーとトゥーズーンとの会見については、Tajārib, II, pp. 69-72, Kāmil, Vol. 8, pp. 418-419, Šūlī, pp. 282-283, Murūj, Vol. 5, pp. 233-234, ‘Uyūn, pp. 409-410, Muntaẓam, Vol. 14, p. 39, Bidāya, Vol. 6, p. 210 を参照。
- (39) この日付・曜日については、ヒジュラ暦で2月18日土曜日 (Šūlī, p. 282), 2月19日 (Kāmil, Vol. 8, p. 419, Muntaẓam, Vol. 14, p. 39, Bidāya, Vol. 6, p. 210), 2月26日 (‘Uyūn, pp. 409-410), 2月28日 (tājārib, II, pp. 69-72) と史料間で異同がみられる。また、Ta’rikh, p. 317 ではムッタキーのラッカ出発からトゥーズーンとの会見までの一連の出来事を1月中のこととしている。
- (40) これはまぶたに色をつけることで、眼を繰り抜く前に行われる。この時この作業はフスン・アッシーラージーヤのグラームであるアッサニーディー (al-Sanīdī) なるものに委ねられたという (‘Uyūn, pp. 409-410)。
- (41) Bidāya, Vol. 6, p. 210 では、ムスタクフィーに対する忠誠の誓いは、トゥーズーンのバグダード帰還後のこととしている。
- (42) al-Munqaṭi’a, p. 243; EI, II, Vol. 7, p. 800, “al-Muttaqi li llāh” を参照。
- (43) アッサーマリーの部分は、Kāmil, Vol. 8, p. 421 ではアッサリーヤ (Abū al-Faraj al-Sāriya), Takmila, p. 144 ではアッサルムズラーヤ (al-Sarmuzrāya), ‘Uyūn, p. 417 ではアッサミリー (al-Sāmīlī) となっている。
- (44) 3月/944年10~11月にそれぞれ裁判官としてバグダードの東岸にイブン・アビー・ムーサー・アッダリール (Ibn Abī Mūsā al-Ḍarīr) として知られるアブー・アブド・アッラーフ・ムハンマド・ブン・イーサー (‘Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. ‘Īsā), 西岸にアブー・アルハサン・ムハンマド・ブン・アルハサン・ブン・アビー・アッシャワーリブ (Abū al-Ḥasan b. Abī al-Shawārib) が任命された (Takmila, p. 144)。
- (45) Tajārib, II, p. 78. cf. Kāmil, Vol. 8, p. 421, Takmila, p. 144, ‘Uyūn, p. 417.
- (46) Tajārib, II, pp. 72-75, Kāmil, Vol. 8, pp. 420-422, Bidāya, Vol. 6, p. 210.
- (47) ナーシル・アッダウラの件は Kāmil, Vol. 8, pp. 446-447, アフマド・ブン・ブワイフの件は Kāmil, Vol. 8, p. 445. を参照。
- (48) ‘Uyūn, p. 421.
- (49) 例えば、325年1月/936年11月19日にカリフ・ラーディーはバリーディー家に対する遠征で、大アミールのイブン・ラーイクとともにワーシトに下っている (Tajārib, I, p. 357, Kāmil, Vol. 8, p. 329)。また327年1月/938年10~11月にラーディーは第2代大アミール・バジュカム (任: 326-329/938-941) とモスル、ディヤール・ラビーア (Diyar Rabi a) へ進軍している (Tajārib, I, p. 405, Kāmil, Vol. 8, p. 353)。さらにムッタキー自身も、330/941-942年に再度大アミールに就任したイブン・ラーイクとともにバリーディー家との戦いに出撃している (Ta’rikh, p. 316)。
- (50) トゥーズーンの政権におけるイブン・シールザードの活動については、拙稿「大アミール・クールティキーンとイブン・シールザードの政策について」『池田雄一教授 古稀記念アジア史論叢』, 中央大学東洋史学研究室編, 白東史学会, 2008年3月, p. 505 を参照。